

遣新羅使と万葉集（その1）

（新羅に遣はさ^せえし使人ら別れを悲し^{しみ}んでの贈答の歌）

今から約千三百年前の天平八（736）年六月に朝鮮半島の統一国家であった新羅国の情勢の把握。両国の関係修復を図るなどのために任命され難波の津（大阪の港）を出航する一行があった。「遣新羅使人」たちであった。

・一行は瀬戸内海を西に進み、筑紫（福岡）に至ったのちに、壱岐・対馬を経て新羅に着き、同年の秋には帰国するつもりだったことが「万葉集」に新羅に出発前に使人らの別（わかれ）を悲しむ贈答歌（巻十五―3581）「秋さらば相見むものを・・・」即ち「秋になったら逢えるものを・・・」の意から想定されている。

・しかし、使人たちの一行は海路の途次の周防灘で逆風にあつて船が漂流したり、あるいは筑紫（九州）に入り風待ちなどのために各所【荒津の筑紫館（現福岡市中央区）志麻郡韓亭（現福岡市西区唐泊）、引津亭（現福岡県糸島郡岐志）、肥前国の松浦郡狛島（現佐賀県唐津市神集島）の港で停泊するなど悪天候に悩まされたこと。さらに「続日本紀」に大宰府においては天平七年（735）年時に天然痘が流行していたことが記され、遣新羅使一行は往路九州においてそれに罹患した模様で。旅中で既に発病し、死者を出している。また、嫌悪な関係にあつた新羅国では使節を拒否されるなどして散々な目にあつて帰朝は予定の同年秋より約二カ月遅れて翌年、天平九（737）年の一月になったとされる。

・万葉集には、この時の遣新羅使の関係歌は145首あり、「別れを悲しんでの贈答の歌」「海路での歌」「旅中誦詠された古歌」などからなる。

・万葉集には遣新羅使の歌の冒頭に次の歌二首が掲げられる。

むこ うら いらえ すどり は

1) 武庫の浦の 入江の渚鳥 羽

きみ はな こい

ぐくもる 君を離れて 恋に

死ぬべし

卷十五—3578 作者・使人の妻

(解説) 武庫の浦の入江の洲にいる鳥が、親鳥の羽につつまれているように、かわいがっていた来てあなたと離れて、私はこがれ死にしてしまひそうです。離別に堪えがたくて、悲嘆のあまり焦がれ死んでしまうとの妻の悲壮な贈歌であろう。

おおぶね いもの

2) 大船に 妹乗るものにあ

は も

らませば 羽ぐくみ持ちて

ゆ

行かましものを 卷十五—3579 作者・使人

(解説) 私の乗って行く大船に妹(妻)が乗っているのだったら、今まで同様かわいがって、羽で包むようにして、一緒に連れて行くこうものを。それが出来ずに残念だと夫が唱和する。

・この二首の歌は、出港地である難波での送別の宴における「留守する妻と遣新羅使人とし出立する夫」の悲別贈答の歌だとの説がある。

・「武庫の浦」は、兵庫県の東部を南流し下流部では大阪市と隣接している兵庫県尼崎市と西宮市の境界を流れ大阪湾に注ぐ武庫川の河口の海辺をいう。

・「武庫」は古代の難波からの対岸の地の呼称で「向ムコ」の意があるといわれる。

(参考文献) 桜井満著「万葉集」、高木市之助「万葉集」、日本歴史地名大系「兵庫県の地名」等

(写生地) 古代の武庫川河口は現在の河口より約6キロメートル離れたJR東海道本線辺りに位置し、それより下流はまだ海だったと見られている。現在の海寄りの平野は近世に開拓されたところが多く、団地等のビルが建ち並び万葉歌に詠われているような海辺の面影は見当たらない。武庫川河口付近に約200mの武庫川をまたいで設置されている阪神電鉄「武庫川駅」ホームの東、尼崎市側河辺から武庫川と対岸の西宮市側の川辺と背景に兵庫県北部にあり観光・保養地で有名な六甲山を描く。(杏花)



